

サンフランシスコ
ドキュメンタリー映画祭

ベルリン
音楽&映画フェスティバル

ボローニャ
BIOGRAFILM映画祭

セントルイス
国際映画祭

バルセロナ
音楽&映画フェスティバル

ドゥー・ユー、
カムバック？

スライ・ストーン

SLY STONE

Dwars productions in Co-production with NPS Television present a film by Willem Alkema "Dance to the Music"

Director of Photography Marc Willighagen Co-producers Edwin & Arno Konings Executive Producers Wijnand Honig, Michiel Hobbelink Edited by Shoot the Rabbit
Bart Leferink, Marcel Buunk, Marc Willighagen, Willem Alkema featuring Sly Stone Directed and Produced by Willem Alkema

SIX AND
FAMILY
STONE



5月16日(土)～新宿K's cinema 全国順次公開

お問い合わせはこちらまで

キュリオスコープ(古賀) Tel:03-5466-8500 Mail:kogayk@curiouscope.co.jp

2010年の本作完成後も、アルケマ監督はスライとの交流を持ち、取材を続けてきた。

そして2015年1月、スライが2010年に元マネージャーであるジェリー・ゴールドステインに対して起こした訴訟の判決が出された。スライ勝訴。これにより、スライ側は500万ドル(約6億円)を得ることとなる。アルケマ監督はこのシーンも今作に盛り込むべく、急きょ再編集を決断。完成は公開直前となる見込み。

つまり、この日本での公開が本作のワールドプレミアとなる—

2015年、伝説のスーパー・スターが蘇生する。

SLY STONE スライ・ストーン

www.curiouscope.jp/SLY/



ファンク・ロック・バンド“スライ&ザ・ファミリー・ストーン”率いるミュージシャン、スライ・ストーン。バンドは60年代後半に登場するや瞬く間に音楽界最大級のビッグネームに君臨するも、75年に突如解散。その後スライは長年消息不明状態であった。そんな彼を20年間以上追いかけ、執念の取材を続けたオランダ人ドキュメンタリスト、ウィレム・アルケマ。生い立ちから、華々しい成功と挫折、友情と裏切り、争い、そして2015年の勝訴判決に至るまで。これまでベールに包まれていたスライの波乱の半生が今、ここに明かされる—

監督：ウィレム・アルケマ

出演：スライ・ストーン / ウィレム・アルケマ

ジェリー・マルティーニ、グレッグ・エリコ、リッチ・ロマネロ、パット・リットオ、シンシア・ロビンソン
(from Sly & The Family Stone)

フランク・ワディ (Funkadelic/James Brown/Bootsy Collins)

ジョージ・クリントン (Funkadelic/Parliament)

シルヴェット・ファン・ロビンソン

ヴェット・ストーン

ノヴィ・ストーン

ナイル・ロジャース (プロデューサー/ギタリスト)

2015年/90分(予定)/オランダ/オランダ語・英語/カラー/16:9/ドキュメンタリー

© Dwars Productions

配給・宣伝：株式会社キュリオスコープ

5/16(土) 新宿 K's cinema 全国順次公開

お問い合わせはこちらまで

キュリオスコープ(古賀) Tel:03-5466-8500 Mail:kogayk@curiouscope.co.jp

【スライ・ストーン (1943年3月15日 -)】



幼少時から教会でゴスペルを歌い、9歳でシングルレコードをリリース。66年に結成したファンク・ロックバンド“スライ&ザ・ファミリー・ストーン”は「ダンス・トゥ・ザ・ミュージック」「エブリディ・ピープル」など大ヒット曲をとばし、一躍全米音楽界のスターダムとなるも、75年に解散。ソロ活動を始めるが、麻薬所持等で幾度も逮捕され、そのうち長期間消息不明状態が続く。家を失くしキャンピングカーで生活しているとも伝えられた。

2010年、元マネージャーを詐欺横領で告訴。2015年1月に勝訴判決が出された。

■解説

文／Yoshioka Masaharu - The Soul Searcher

ファンク伝染病。

「伝説のファンク・スター」スライ・ストーン。1960年代後期から1970年代中期までのほんの短い期間に壮絶なファンク作品を生み出して、姿を消した男。彼の影響を受けたアーティストは数知れず。プリンス、マイケル・ジャクソン、マイルス・デイヴィス、ナイル・ロジャーズ、ジョン・レジェンド、最近ではディアンジェロ。そのファンクの伝染力は、すさまじくアメリカのみならず世界に広がった。

そんなファンク伝染病にかかった一人がオランダに住む映像作家、ウィレム・アルケマだった。アルケマは1993年、スライ&ザ・ファミリー・ストーンの1974年のアルバム『スマール・トーキー』に収録されている「アイ・キャント・ストレイン・マイ・ブレイン」を聴いて衝撃を受け、このファンク・スターの行方を探す決意を固める。

すでにその時点で伝説化していたスライ・ストーンは、音楽活動をしているのか、どこで何をしているのかさえつかめなかった。そこで彼はリサーチを始め、多くの人間に出会い、遅々としながらもスライへ迫る。同じくオランダに住むスライ・ストーンの双子のマニア、コニング兄弟は、スライの本を書こうと考え、すでにリサーチを進めており、その協力は大きな原動力となった。様々な古いアーカイブ映像を掘り起し、スライ・ストーンの足跡を追い、とあるルートからスライ・ストーンが税金を滞納していたことから住所を突き止める。



インタビュー条件。

スライのバンド・メンバーの協力を得て、徐々に一歩ずつスライに近づく監督たち。そして、決して表に出てこないスライがついにインタビューに答えるといってきた。しかし、条件が付いた。それは一一。 「質問はひとつだけだ」。

もちろん、インタビューに答えてくれるという返事だけでも大きな進展だったが、気分屋のスライは本当にインタビューに答えてくれるのか。質問は一つしたら、もうその場から立ち去ってしまうのか。

1993年から粘り強く神出鬼没のスライを追い、スライの周辺を取材し、アーカイヴ映像を掘り起こしてきたアルケマ監督。すでに22年の歳月が流れた。大方のフィルムの編集が終わった2015年1月、スライ・ストーンが2010年に元マネージャーであるジェリー・ゴールドステインに対して起こした訴訟の判決が出た。これにより、スライ側は500万ドル（約6億円）を得ることになった。アルケマ監督は、このシーンも今作に急遽編集で差し込む予定だ。

アルケマ監督のスライ・ストーンをサーチンする物語は続く。



5/16(土) 新宿 K's cinema 全国順次公開

お問い合わせはこちらまで
キュリオスコープ(古賀) Tel:03-5466-8500 Mail:kogayk@curiouscope.co.jp

スライ・ストーン～そのファンクな人生

文／Yoshioka Masaharu – The Soul Searcher

ファンク。

「ファンク」を語るときにジェームス・ブラウンと並んで忘れられないのが、スライ・ストーンだ。彼はまた、ブラック・ミュージックの歴史の中で、人種間の壁を取り除いた革新的アーティストでもある。1960 年代後期にサンフランシスコ・ベイ・エリアから登場したファンク創始者のひとり、スライ・ストーンは本名シルヴェスター・スチュワート。1943 年 3 月 15 日、テキサス州デントンに 5 人兄弟の 2 番目として生まれた。両親が信心深かったため子供たちは教会でゴスペル音楽に触れた。シルヴェスター誕生後もなく一家はサンフランシスコ・ベイ・エリアへ移住。長女（第一子）ロレッタ（1934 年生まれ）以外の 4 人、長男（第二子）シルヴェスター（1943 年生まれ）、ローズ（1945 年生まれ）、フレディー（1947 年生まれ）、ヴァエッタ（1950 年生まれ）は音楽の道に。この 4 人は「ザ・スチュワート・フォー」と名乗り 78 回転のシングル盤「オン・ザ・バトルフィールド」を 1952 年に出している。

シルヴェスターらは音楽活動を続け、地元のバンドに参加。そのうちのヴィスケインズというグループは、いわゆる当時流行りの「ドゥー・ワップ」を歌い 7 インチ・シングルを出した。

スライ。

ハイスクール時代にクラスメートが、シルヴェスターのスペル Sylvester を Slyvester と間違えたことから、この頭の 3 文字、Sly（スライ）と呼ばれるようになり、以降このニックネームが定着する。1960 年代中期からはいわゆる「フラワー・ムーヴメント」「ヒッピー・ムーヴメント」がサンフランシスコを中心に大きな流行、現象となり、同時に様々なドラッグが全米に蔓延した。「Stone」は酒や麻薬などでハイになることを意味したが、ドラッグ好きのスライは、自ら「スライ・ストーン」と名乗るようになり、自らのグループ名を「ファミリー・ストーン」とした。この名前こそ、そのフラワー・ムーヴメントの落とし子的存在となった。1960 年代中期、スライは地元のインディ・レーベル、「オータム・レコード」で今で言うところの A&R、プロデューサー的な仕事をして、レコード制作にかかわるようになる。てがけた作品の中ではボビー・フリーマンの「カモン・アンド・スウェイム」が全米トップ 10 入りする大ヒットとなり、注目される。そして、ほぼ同じころ、1964 年から 1967 年頃まで、スライは地元のラジオ局「KSOL」局でラジオ DJ として活動。毎日夜 7 時から 12 時まで生放送を担当していた。彼は、DJ をエンタテインメントにして、当時のソウル・ミュージック専門局にしては珍しく、ソウル・ヒットだけでなく、スライ本人が気に入ったロック物（ビートルズやローリング・ストーンズなど）もかけていた。

契約。

スライ・ストーンは、音楽活動をさらに活発化。1967年、スライ&ファミリー・ストーンはCBSレコードと契約。同年10月アルバム『ア・ホール・ニュー・シング』で大々的にデビュー。さらに1968年、2作目『ダンス・トゥ・ザ・ミュージック』、『ライフ』、1969年『スタンド』、1971年『ゼアリズ・ア・ライオット・ゴーイン・オン（邦題、暴動）』と立て続けに問題作をリリース。シングルでは「ダンス・トゥ・ザ・ミュージック」（1968年1月）、「エヴリデイ・ピープル」（1968年12月）、「サンキュー」（1970年1月）、「ファミリー・アフェア」（1971年11月）と大ヒットを生み出した。音楽的にはロックと融合した独特のファンク・サウンドを確立し、1970年代初期までに確固たる地位を築いた。

1969年8月、スライ&ザ・ファミリー・ストーンは、伝説となった音楽フェスティヴァル「ウッドストック」に登場。2日目（8月16日）深夜の深い時間帯だったが、その場に残った観客からはよいリアクションを得たようだ。ちなみに、最近明かされたギャラ一覧などによると、出演約30アーティストで8番目のギャラ、約7000ドル（当時のレートで約252万円）を得ていた。ほぼ新人アーティストとしては破格のギャラだったといえるかもしれない。

しかし、その後、1969年秋、彼らが本拠をサンフランシスコからロスアンジェルスに移すと、彼らのドラッグ禍が激しくなり、通常の生活を維持することが難しくなった。レコーディングもままならず、アルバム制作も滞りがちになる。またライヴ・コンサートにも穴をあけるなどして、ライヴを仕切るプロモーターからも敬遠されるようになる。結局1975年に「アイ・ゲット・ハイ・オン・ユー」のソウル・チャート・トップ10入りソングを最後に、トップ10入りするヒットは生まれず、スライの存在感は徐々に薄れていった。

音楽的な面で言えば、特にリズム・ボックスを多用したサウンドはその後のソウル、ブラック・ミュージックだけでなくロック音楽全般にも影響を与え、さらに、ファミリー・ストーンのベース奏者だったラリー・グラハムのいわゆる「スラップ・ベース」（チョッパー・ベース）という叩くような奏法は、その後のベース奏法に多大な影響を与え、多くのフォロワーを生み出した。

伝説化。

しかし、1980年代は行動や行方がよく知られず、スライ・ストーンは音楽業界内で伝説化。そんな中1986年、プリンス・ファミリーのジェシー・ジョンソンがスライ・ストーンとの共作曲「クレイジー」を発表。久々のヒットとなったが、この後も続かず、また長い沈黙を守ることになった。

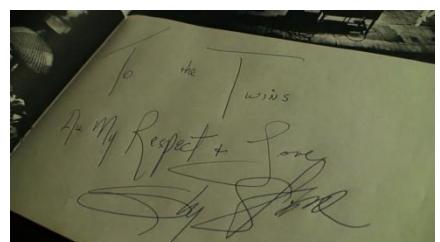
1993年、ロック殿堂の授賞式に登場、観客席を大いに沸かせたが、その後は2006年2月のグラミー賞授賞式に姿を現し、大喝采を浴びるまで再び沈黙。しかし、グラミーの登場によって存在感がアピールできたためか、2007年夏にヨーロッパ・ツアー、その流れで2008年8月末、初来

日、東京ジャズ、ブルーノート東京でのライヴが実現した。さらに2010年1月にはルーファスのトニー・メイデンとともに再び来日、ブルーノート東京でライヴを繰り広げた。

2011年8月、およそ29年ぶりのスタジオ録音アルバム『アイム・バック！ ファミリー&フレンズ』をリリース。

また、2010年1月に元マネージャーであるジェリー・ゴールドsteinに対して契約金問題で5000万ドル（約60億円）の損害を求めていたが、2015年1月、500万ドル（約6億円）で勝訴した。

一時期はホームレスになったとも伝えられていたスライ・ストーンだが、創作意欲は衰えることなく、「あなたの最高傑作は？」の問い合わせに、「（まだできていない）次作だ」と答えている。



5/16(土) 新宿 K's cinema 全国順次公開